

アンドレアス・シュタイアーフォルテピアノリサイタル

1部

チェンバロ・ソナタ 第4番 二長調 Op.1-4 …… ガルッピ

専門家と愛好者のためのソナタ集 第2集から

ロンド イ短調 Wq56-5 …… C.P.E.バッハ

専門家と愛好者のためのソナタと自由な幻想曲から

幻想曲 ハ長調 Wq61-6 …… C.P.E.バッハ

ピアノ・ソナタ 第49番 変ホ長調 Hob.XVI:49 Op.66

(ウィーン原典版番号: 第59番) …… ハイドン

2部

音楽の捧げもの BWV1079から

3声のリチュエルカーレ …… J.S.バッハ

平均律クラヴィーア曲集 第2巻から

第12番 へ短調 BWV881 …… J.S.バッハ

ピアノ・ソナタ

第18番 へ長調 K.533/494 …… モーツアルト

冬

四季コンサート 2015

2015年12月13日(日) 18:00開場 18:45開演

会場: アクトシティ浜松中ホール

主催: 浜松音楽友の会

プロフィール

ドイツのゲッティンゲン生まれ。ハノーヴァーとアムステルダムでピアノとチェンバロを学び、1983年から86年までムジカ・アンティクア・ケルンのチェンバロ奏者として活躍した。その後ソロ活動に専念、フォルテピアノとチェンバロのスペシャリストとして国際的に活躍している。80年代初頭のデビュー当時は、チェンバロとフォルテピアノを弾くにもかかわらず、「バックハウスやケンプ以来のドイツ音楽を代弁するピアニスト」と賞され、彼の大きな才能が注目された。その後も真摯に自らの藝術を極め、今や「巨匠」への道を着実に歩む数少ない実力者として広く認められるところとなった。

ソロ活動に加えて、リート伴奏、室内楽奏者としても、アンネ=ゾフィー・ファン・オッター、ペドロ・メルスドルフ、アレクセイ・リュビモフ、ジャン=ギアン・ケラスら名だたるアーティストと共に演を重ねている。なかでもテノール歌手クリストフ・ブレガルディエンとのデュオは秀逸で、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ベートーヴェン、ラッケナーやブラームスらのドイツ・リートの録音でその精華を聴くことができる。

CDはドイツ・ハルモニアムンディを中心に数多く録音し、レコード・アカデミー賞をはじめ多くの賞を受賞している。近年は「ゴルトベルク変奏曲」、「ディアベリ変奏曲」が発表され、いずれも好評を得ている。

アンドレアス・シュタイアーフォルテピアノリサイタル

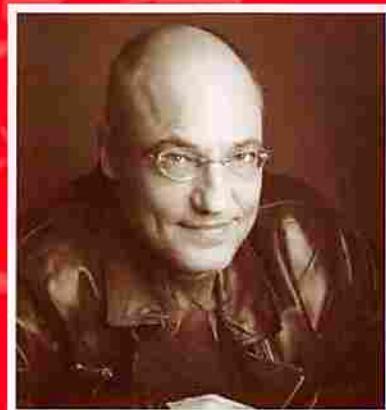


写真: Eric Manas

ANDREAS STAIER
FORTEPIANO RECITAL

●ガルッピ／チェンバロ・ソナタ 第4番 二長調 Op.1-4

ガルッピ(1706~1785)は、ヴェネツィアに生まれたオペラ作曲家、チェンバロ奏者である。フィレンツェにあるペルゴラ劇場のチェンバロ奏者としてスタートし、生地に戻って本格的にオペラ創作を手掛けた。1741年から43年にはロンドンに滞在してオペラの作曲、上演を試みた他は故郷で創作活動を展開、数々のオラトリオも作曲している。

聖マルコ大聖堂の楽長なども務め、1765年にはエカテリーナ2世に招かれてペテルブルクの宮廷やモスクワでも活躍したと伝えられているが、100曲ほどのオペラやおよそ20曲のオラトリオのほか、80曲余りのチェンバロ作品を遺している。

「チェンバロ・ソナタ集(チェンバロの慰め)」は1781年の作品で、全6曲で構成されている。その第4曲が本作。香り高い気品とみずみずしい生気に満ち溢れている。

●C.P.E.バッハ／専門家と愛好者のためのソナタ集 第2集から ロンド イ短調 Wq56-5

専門家と愛好者のためのソナタと自由な幻想曲から 幻想曲 ハ長調 Wq61-6

J.S.バッハと最初の妻マリア・バルバラの間に次男として生まれたのが、C.P.E.バッハ(1714~1788)である。父から作曲と鍵盤楽器奏法を手解きされ、ライプツィヒ大学などで法律を学んだが、結局プロイセン王国の皇太子フリードリヒ(後のフリードリヒ大王)の宮廷にチェンバロ奏者として奉職、皇太子が王位継承すると1840年、ベルリン宮廷楽団に迎えられた。生前は父よりも有名で、兄弟の中では誰よりも世俗的な成功を収めたが、本人は父の指導があったからこそ自分が成功することができたと主張し続けた。その意味においては、後のバッハ神話を創り出した中心人物であったと言える。他のバッハ一族の作曲家と区別するために「ベルリンのバッハ」などとも呼ばれる。

数十曲のチェンバロ協奏曲の他、夥しい数のチェンバロ独奏曲を遺した。Wq56とWq61はそれぞれ6曲ずつで構成されており、Wq56-5は1780年頃に書かれたトッカータ的な作品、1787年作のWq61-6は軽快な躍動感が印象的だ。

●ハイドン／ピアノ・ソナタ 第49番 変ホ長調 Hob.XVI:49 Op.66 (ウィーン原典版番号第59番)

ハイドン(1732~1809)のピアノ・ソナタは、鍵盤楽器の発展と時を重ねている。初期の楽譜には「ハープシコード用」と書かれていたが、1783年には「ピアノ・フォルテまたはハープシコードのための」と記され、チェンバロに代わってピアノが台頭してきた様子が窺われる。そして1784年に出版されたソナタからはハープシコードの文字が消え、作曲様式にも大胆な変換が見られる。

ハイドンは1761年からおよそ30年ほど、ハンガリー有数の大貴族エスティルハージ家に楽長などとして仕えたが、このソナタはエスティルハージ時代最後期である1790年に書き上げられた。ハイドンが敬愛するイエリシュク夫人の依頼でゲンツィンガー夫人のために作曲し、献呈したことがわかっている。規模も大きく、それまで2楽章でソナタを書いていたハイドンが、およそ10年ぶりに3楽章構成を採り入れたソナタでもある。

●J.S.バッハ／音楽の捧げもの BWV1079から 3声のリチャード・カーレ

J.S.バッハ(1685~1750)は1747年、プロイセンのフリードリヒ大王に招かれてベルリンの宮廷を訪ねた。フルート奏者としても頗る資質を持った大王の御前で、バッハは大王の与えた主題を使つたりチャード・カーレ(フーガの一種)を即興演奏して大王を大いに驚かせた。その後ライプツィヒに帰ったバッハは、大王のテーマを展開させた3声のリチャード・カーレ、5曲のカノン、1曲のカノン風フーガを創作してまとめ、献辞を添えて大王に捧げたのである。

フルート愛好家の大王を意識して編成は多彩、フルート、ヴァイオリン、クラヴィーア(鍵盤楽器の総称)のトリオ・ソナタも置かれている。3声のリチャード・カーレはその第1曲、クラヴィーア独奏のために書かれている。

●J.S.バッハ／平均律クラヴィーア曲集 第2巻から 第12番 ハ短調 BWV881

J.S.バッハはクラヴィーアのために、1オクターヴにある12音すべての長調と短調を用い、第1巻、第2巻それぞれ24曲のプレリュード(前奏曲)とフーガによる曲集「平均律クラヴィーア曲集」を書いた。当時としてもきわめて画期的なものであり、第1巻はバッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた1722年に、第2巻はライプツィヒの聖トーマス教会カントールなどの地位にあった1744年に完成したと伝えられている。

第12番のプレリュードは和声的な方向性を持っており、ややイタリア的な傾向がある。フーガは3声で、簡明な対位法によっている。

●モーツアルト／ピアノ・ソナタ 第18番 ハ長調 K.533/494

モーツアルト(1756~1791)のヴァイオリン・ソナタは約40曲ほどもあるのに対し、ピアノ・ソナタは半数にも満たない。当時ヴァイオリンとピアノによるソナタが流行っていたこと、即興演奏の天才でもあったモーツアルトはあえて譜面に残す必要がなかったこと、また何曲かは姉が出版社に送り、そこで散逸してしまったことなどが原因として挙げられる。

このソナタは少々変わったエピソードを持っている。というのも、このソナタの第1楽章と第2楽章は、モーツアルト自身が1788年1月に書いた「アレグロとアンダンテ」であり、さらに1786年6月に書いた「小さなロンド K.494」を大きく改訂して第3楽章に置いたのである。それでも見事なソナタに仕上げてしまうところが、やはり「モーツアルトの天才」なのだろう。最晩年の1790年に出版された。

当日使用されたフォルテピアノの製作者からのコメント

浜松音楽友の会の皆様へ

先日（2015年12月13日）の冬のコンサート「アンドレアス・シュタイアー フォルテピアノリサイタル」で使用された楽器に関して、友の会の事務局から、情報の提供依頼があり、その時点で、コンサートのチラシにも、当日配布されたプログラムにも、この点でのインフォメーションが全く無い事に気がつきました。今回のリサイタルに即した説明を致します。

まず、お越しになられた皆様の中には、舞台に載っている小さな楽器を見て、とても驚かれた方も多いかと思います。あるいは、タイトル名の「フォルテピアノ」と「ピアノフォルテ」とでは、どこが違うのかと疑問に思われた方もいるでしょう。「フォルテピアノ」は、現在では“古いスタイルのピアノ”的意味で使われています。

さて、今回使用された楽器ですが、これは、ドイツのニュルンベルクの博物館にある、A.ヴォルターが1790年頃にウィーンで作ったピアノを基にして、私が2013年に製作しました。音域はF1～g3、5オクターブと2音（63鍵）です。ハイドンやモーツアルトの全ての曲だけでなく、ベートーヴェンの半数以上のソナタも弾くことが出来ます。本体の主要な部分はスプルースという松の仲間で作ってあります。鉄骨や鋳物は入っていません。外側は、ウィーン芸術史博物館にある、同じヴォルター作のピアノを模して、象嵌とマホガニーの化粧板で仕上げてあります。ちなみに前出の三作曲家の残した手紙には、ヴォルターの作ったピアノについての記述があり、彼らから高く評価されていた事が分かっています。

ハンマーの動く仕組み、アクションは、現代のピアノ（モダンピアノ）とは全く違います。その特徴は、打弦の強弱が纖細で、尚且つ、機敏にコントロール出来る事で、モダンピアノの五分の一にも満たないであろう小さなハンマーが、驚く程に軽いタッチで動きます。お聞きになられてお分かりでしょうが、音量こそ小さいものの、弱音と強音の差はモダンピアノ以上に大きく、とても広い表現が可能です。

ペダル（ダンパー・ペダル等）ですが、ご覧になってお分かりになった様に、この楽器には付いてはいません。しかし、実際の演奏から、この機能の存在に気がついた事でしょう。この時代のピアノには、レバーと言う形で、楽器本体に付いていました。今回の楽器では、ダンパーの開放を操作出来る（ダンパー・ペダルに相当する）ものと、弦とハンマーの間に薄いフェルトを入れて音を柔らかくする（アップライトによくある）もの、ウナコルダ（弱音ペダルとかソフトペダルとも呼ばれる）の3機能が、膝で操作出来る様になっています。膝レバーは、奏者には常に膝を閉じて弾くという、ちょっと無理な姿勢が要求されますから、1800年を越えると、現代と同じ足で踏む形に変化していきます。しかし、1780年代までは、このレバーは大抵は鍵盤の周りについており、それは手で動かされました。ですから、ハイドン、モーツアルト等は、その当時、どんなタイミングでこのレバーを使っていたのか、現代では常に議論となります。昔のスタイルの楽器を演奏する時、作曲されたその当時の演奏が、現在使われているモダンピアノで弾く演奏とは、相當に違った表現であった事を示唆してくれます。

最後に、もう一度プログラムの演奏曲目を見て下さい。前半と後半を締め括る二つのソナタの成立あるいは出版は1790年であり、今回のピアノとまさに同時代です。名手シュタイアーが、深い意図を持ってプログラムを組んだ事が、お分かりになると思います。